第3種郵便物認可　朝日新聞（夕刊）　2015年(平)
5月13日

京の流儀 ストンと落ちる

いけず石

布袋さん?

親子のよう

清水焼とコラボ

パケツをコンクリートで固めた

「鳥居」つき

奇抜な色使いで超有名

鬼門だから塩を盛る

飛び出し注意の看板と

いけず石を愛してやまない吉田伊織さん＝いずれも京都市中京区、伊藤菜々子撮影

京都の路地や家の角に、石がそっと置いてあるのを見たことがないだろうか。車の運転席から見えず、曲がろうとしてゴリッ。あぁ、車を擦った……。今回の撮影を担当した伊藤菜々子カメラマンも体験者。思わず「いけず！」と叫んだそうだ。

そのように置かれた石自体は全国的に見られるが、道が狭く、石の数が多い京都ではいつの頃からかいけず石と呼ばれるようになった。「京都の人間はいけずができて一人前」。以前、京都人から聞いたことがあるが、石までもいけずなんですか。

由来は？　設置者の思いは？　あれこれ調べようと思っていると先駆者に行き着いた。京都市立堀川高校（京都市中京区）の人間探究科3年、吉田伊織さん(17)だ。

吉田さんは中学生の時に香川県から引っ越してきた。するとまちのあちこちに石が置いてある。香川では見たことない物体に衝撃を受けた。というか一目ぼれした。今ではいけず石ストラップを作って配るほどの入れあげようで、「いつから置かれたんだろうと考えるだけで一日が過ぎちゃう」ほどだという。

吉田さんが学ぶ堀川高校では2年生で論文を書く。吉田さんは迷わずいけず石をテーマに選んだ。が、観光本やネットの記載は多いものの、学術的な文献がほとんどなかったため、研究は難航。数カ月かけて実地調査やインタビューを重ね、論文「京都における『いけず石』の歴史的・文化的考察」にまとめ上げた。

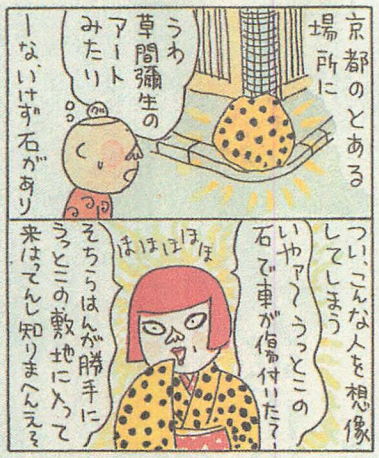
それによると、いけず石は江戸時代の図絵などに見られる「車除け石」にさかのぼれる可能性が高いという。現在の目的も車よけが基本だ。ただ、いけず石が置かれた家に10軒近く飛び込みインタビューした結果、中には鬼門の方角に置いたり、家と家の境界線に置いたりと、別の役割を持つ石も存在することが分かった。見た目も塗装したものあり、清水焼のものありと様々なバリエーションがあった。

特に面白かったのは、インタビューした全員が「いけず石」という呼び方を知らなかったこと。「京都人にとっては意識されることのない当たり前の石で、車をぶつけた他府県の人がそう呼ぶようになったのでは」と推察している。

いけずは一般的には「意地悪」という意味。でも、吉田さんは「京都人にとってはそれだけではない」と考える。ぶぶ漬け（お茶漬け）を出されたら先方からの帰ってほしい合図という、いけずの有名な例も「遠回しに言うことで対立を避ける京都人の気質を指している」という。

立て看板やポールを置くのでなく、自然石を置くことで、遠回しに壁にぶつけてほしくないことを示す。「京都の流儀にかなったもので、いけず石は京都人から見てもその気質を表す文化なんです」

ある持ち主は「いけず、いけずと言われるけど、〝親切石〟の気持ちで置いてるんです」と教えてくれた。なるほど……、奥深すぎる。（向井大輔）



絵・グレゴリ青山

いい距離感保つため

生まれも育ちも京都
狂言師・茂山逸平（しげやまいっぺい）さん(35)

10年以上前に車のホイールをこすりました。僕も被害者なんです（笑）。今も大きな車が曲がるのをつい注視してしまいます。京都は一方通行にせまなあかんぐらい細い道が多く、碁盤の目に整備されていて直角に曲がることが多いから「注意してね」ということなんです。家にぶつけて大事になるよりは、ホイールぐらいで済んだ方がえぇんちゃうっていう心遣い。いい距離感で付き合うための石です。

■関西遺産の推薦を募ります。
〈ファクス〉06・6229・2649
〈メール〉do-kansai@asahi.com